

辻川界限

柳田國男・松岡家顕彰会会報 第3号



第27回山桃忌記念松岡家生家にて小泉凡先生を囲んで（平成18年8月6日）

柳田國男と

小泉八雲について

（財）柳田國男・松岡家顕彰会

柳田國男・松岡家顕彰会に於いて、毎年山桃忌を催し、多数の方々に参加していただき、井上通泰・柳田國男の法要を致しており、本年は小泉八雲の曾孫小泉凡先生に講演していただき内容は次頁の通りです。

中はりま県民局ふるさと再生課に於いて、銀の馬車道の魅力を再発見し、格差社会に於いて都市と大きく差のついた田舎に活力をと努力しておられ、生野から飾磨へのコースでは当時（明治初期）の道路として日本初の高速道路が建設されました。このコースを神河町・市川町・福崎町の歴史遺産、観光資源等を楽しみながら散策していただくとうと計画され福崎町商工会の主催で辻川界限ウォークが十月十五日に開催されました。

辻川区には、氏神の鈴の森神社、柳田國男の生家・記念館、大庄屋三木家、歴史民俗資料館、有井堂、稲荷社、地藏堂、駒ヶ岩と見どころも多くあり、対策として辻川界限のガイド役を育成しなければならぬ為、辻川区の十数人の方々に勉強していただき辻川界限ウォークに参加の方々に、この界限を理解していただく為、柳田國男・松岡家顕彰会が指導し、八月の山桃忌辻川界限ウォーク、共々参加された方々に楽しい一日を過ごしていただきました。

柳田國男と小泉八雲について

小泉 凡

私が最初に柳田國男先生とか井上通泰先生のお名前を聞いたのは、多分小学校のころだったと思うんです。井上通泰が実は、青山とは別に東京の世田谷区の世田というところに、当時は玉川世田町とっていただけなんですが、玉川のはとりです。標高40メートルほどの大地が田圃調布というところから国分寺の方まで続いているんですけれども、その台地の上にな天荘という別荘をつくられました。その南天荘で週末、あるいは休みの期間等は執筆活動をされたり、そこに文人たちが集まっていたという事ですが、その南天荘が昭和30年頃でしょうか、売りに出されるとい話がありまして、それを聞きつけた私の祖父がその話に飛びついたということがありました。私の祖父は小泉八雲の長男に当たるんです、小泉一雄と申しますけれども、私が4歳の時まで生きてましたので、辛うじて記憶はあります。その祖父が大変玉川を愛してまして、東京都と神奈川県の間を流れている川なんですけれども、みずから、始終、玉川に出向

きまして、当時玉川っていうのは清れいでアユが名物だったんですね。玉川でアユ料理を食べるといのがちょっとした東京の人達のせいたくというか楽しみだったんですね。まさにアイルランド人と日本人の混血、あいのこだということ、玉川のアユと掛けて「あゆの子」というペンネームをずっと使っていたんですけれども、そんな中でこの話に飛びつきまして、ぜひとも譲っていただきたいと言って、井上通泰さんのご令息の泰忠さんにお願いをして、柳田國男は1900年から約6年間早稲田大学で農政学を担当したという事になっていきます。小泉八雲、本名ラファディオ・ハーン、アイルランド人になるんですが、明治29年に神戸に住んでいるときに帰化しまして、「八雲立つ、出雲八重垣、妻籠みに」という素戔嗚尊の詠んだ歌ですね、あのまくら言葉の八雲立つからとって小泉八雲という日本名を持ちまして日本人になったわけですが、この八雲は1904年最晩年なんです、亡くなる年の3月から9月

まで、わずか半年ですが早稲田大学で教鞭を執りました。英文学史と英文学の講義をしておりますけれども、実は、柳田國男も小泉八雲も出講日が土曜日だったということまでわかりました。(中略) 小泉八雲は日本



町制五十周年

に来る前は約20年間アメリカのシナティーンという中西部の町とニューヨークという南部の町、そしてカリブ海のマルティニークという島トータルで約20年間住んでいます。その後、日本に来たわけですが、その間、日本にかなり民俗学的な活動をしているんですね。本格的に書物にあらわしていくのは35歳のころですか、1885年、例えばニューオリンズにいるときにゴンゾゼーブ、クレオールことわざ小辞典という「ことわざ辞典」を1人で編集しているんですね。「真に完全なことわざ辞典というのは、たとえ語学力、時間的余裕、財力、それに収集旅行に恵まれていても、到底1人の人間の力でできるところではない。民族学会にして初めてこの種の企画が成功できるのである。いまだ組織だった努力が全くなされていない現状をかんがみ、決してその欠落を補うというのではなくて、一例を提示することを少しも私はちゅうちよするものではない。針が通れば糸は続く」、こういう序文を書いていまして、ということはどうも自分も民俗学というのはこれから必要な学問だと。アメリカではまだ不幸にしてその地盤が全く固まっていない、組織的な活動がなされていないので、その草分け的な仕事としてこのことわざ辞典を編集するということを言っているんです。(中略) ハーン自身目が悪い人だったんです。小泉八雲は16歳のときに左目をプランコ遊びで失明するんです。そして、残る右目も極端に視力が悪くて、恐らく0・00幾つというぐらいの視力なんです。ほとんど見えない。要するに、薄明状態で日本を見ていたんですね。じゃあ、何で30冊も本が書けたのか、日本に来てからは15冊ぐらいですかね、15冊も本が書けたのかと言うと、これはやっぱり耳とか、さわって感じる触覚と

か、触れて感じる感覚、それから鼻
で、おつて感じる感覚、嗅覚とか、
あるいは感性とか。特に耳というも
のを、使つて日本文化を感じとつたか
らじゃないかと思ふんです。

今でも欧米諸国では、結構この本
は、ハーンの書いた著書は今でも読
まれています。「知られざる日本の
面影」という松江のことを書いた紀
行文には、今でもその本1冊持つて
松江に尋ねてくる外国人が毎年何人
もいるぐらいのガイドブックとして
の役割も果たしているんですけれど
も、それにはやはり、目だけではな
い、五感を使つて観察したつてこと
があると思ふんですが、柳田國男も
非常にそういう五感力を、研ぎ澄ま
された五感力を持つていた方だと思
ふんです。

明治大正史世相篇はご存じのよう
に、柳田國男が特に日本の江戸の町
の世相の変化というのを書いている
作品なんですけれども、私の大好き
な文章でもあります。

「われわれが美しい大きな都市に
住みながら、何か大切な好い物をな
くしたような心持が去らぬのは、眼
よりもむしろ耳のほうに原因があつ
た。すなわちこの新たな騒音の苦に
なり出す前から、人知れず整理せら

れていた物の音は多かつたので、夏
の日中をふれてゆく苗売り、近江の
蚊帳売り、その他いろいろの物売り
の声の、何の入用もないのに恋しが
られるのは、すなわちまたわれわれ
の鳥を愛するの情と似たものであつ
た」、柳田國男はこういうふうと言
つてゐるんですね。

すなわち、都市の変化というのは
むしろ耳で感じる方が大きいことが
あるというんです。例えば、物売り
が来なくなつても、今、店は幾らで
もあつて不便は感じない。けれども、
物売りの声が聞こえない、あの「金
魚え、金魚」とか、ああいう声が全
く町から消えてしまうと、都市のハ
ーモニーの一翼を担つていた声がな
くなつたという、そういう印象を持
つというんですね。初めて、音とい
うのがいかに重要かということを感じ
ると言うんですけれども、やはり
こういう感覚というのは非常に耳を
研ぎ澄ましていないと発見できない
事なんではないかと言うふうには私
思います。

例えば、松江の町なんていうのは
ほとんど耳で書いていると言つても
いいかもしれません。松江の町の朝
の表現というのは、目を使わないで
ずつと書いていくんですね。まず米

つきの音がする、まくら元からです
ね。そして、これは日本人の心臓の
音のような気がするなんていう感じ
方をしています。

また、地藏堂の勤行の音が聞こえ
たり、遠くの東光寺の鐘の音が聞こ
えたり、あるいは大橋を渡る下駄の
音が聞こえて来たり、それから、物
売りの声が聞こえて来たり、そう言
うふうにして、本当の耳を駆使して
松江の町を表現しているんですね。

だから、100年たった今もある
程度、西洋の方からも非常に愛読さ
れ続けているゆえんではないかな、
そんなふうと思ふんですけれども。

(中略)

本当に今日は懐かしい辻川にお邪
魔する事が出来て嬉しく思つており
ます。十五、六年前に私はこちらの
方で民俗調査のお手伝いをさせてい
ただいた事がありまして、辻川と鍛
冶屋と言う集落で何回か聞き書きさ
せていただいたことがあつたんです
が、本当に、今日はまた、山桃忌と
言うすばらしい機会にお呼びいただ
きまして有難うございました。また
ますこれからこちらの柳田國男・松
岡家顕彰会の皆様のご発展と、また
福崎町のご発展をお祈りして今日の
話を終わりにさせていただきます。

小泉 凡 (こいずみ ほん)

◆経歴

1961年7月10日 東京都世田谷
区で生まれる。

成城大学文学部文化史学科

成城大学院文学研究科日本常民文

化専攻博士課程。専攻は民俗学

1987年 松江市に赴任

松江市立女子高等学校講師

小泉八雲記念館学芸員

現在 島根女子短期大学助教授

小泉八雲記念館顧問

小泉八雲の直系のひ孫

◆主な著書

民俗学者・小泉八雲

文学アルバム小泉八雲記

八雲の五四年―松江からみた人と文学
境界の神―日本人の病理観から

日本民俗学

◆所属学会

日本民俗学会・山陰民俗学会

日本昔話学会

日本英文学会中国支部

日本英文学会広島支部・八雲会

日本アイランド協会

イアジル・ジャパン

(日本アイランド文学会日本支部)

山陰日本アイランド協会

館だより

伊勢の大神楽



▲伊勢の大神楽

天照皇大神のご神徳をえて、神来舞で、火神を鎮め、四方のお祓いをし、家々の繁栄村々の繁栄をお祈りします。

本年も神楽(獅子舞)は柳田國男・松岡家顕彰会記念館が主催し、当日第一に辻川区氏神、鈴の森神社で奉納の舞、次に柳田國男と兄弟の生家を祈り清祓いをし、記念館前庭で獅子舞を納めてもらいますので多数参観に来て下さるよう御案内致します。

記

日時 平成十八年十一月十八日(土)

午後一時三十分から

場所 (勸柳田國男・松岡家顕彰会記念館前庭)

入場料 無料

※雨天の場合は翌日の日曜日

岩田健二郎版画教室

版画家、岩田健二郎先生の指導で、年賀状の教室を開きます。友人お誘い合せ参加下さい。

日時 平成十八年十一月十二日(日)

午後一時三十分から

場所 (勸柳田國男・松岡家顕彰会記念館)

費用 材料代 一枚 百円

持参品 筆記用具 彫刻刀持っておられる方は持参して下さい。

彫刻刀をお持ちでない方は申出て下さい。

申込先 (勸柳田國男・松岡家顕彰会記念館)

※小学生の低学年の方は保護者と共に参加して下さい。

柳田國男・松岡家顕彰会 記念館屋根修理に関する ご寄付のお願い

柳田國男・松岡家顕彰会は、昭和四十七年に兵庫県教育委員会より財団法人として認可され、昭和五十年には柳田國男生誕百年を記念して、

柳田國男及び松岡家兄弟の優れた業績を永く後世に伝え、更に地域文化の向上と教育の振興に資することを目的に記念館が建設されました。

福崎町をはじめ各種団体、個人等多くの方々のご厚志を頂き、今日まで財団法人の運営、建物の維持管理、資料等の収集、保存を行い法人の充実を図って参りました。

しかし、近年、築三十年を超える記念館の建物に老朽化による雨漏りが収蔵庫、倉庫の天井に見られこのまま放置すれば大切な資料に被害を及ぼすこととなり早急に修理する必要が生じて参りました。

今回の屋根の修理には、町の補助金の交付を受けながら工事を進めようとしていますが、資金が不足している現状に直面しております。

地域文化の向上と教育の振興にという目的を達成するためにも記念館が、柳田國男及び松岡兄弟の業績を情報発信できる環境整備することが大切ではないかと考えます。

つきましては、厳しい社会情勢の中、誠に恐縮ではございますが、本事業の趣旨をご理解の上、何卒ご賛同とご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

編集後記

本年は小泉八雲の曾孫にあたる小泉凡先生に、山桃忌に来館いただき生家で、小泉八雲・柳田國男の両名は「目、鼻、耳、味覚」を生かして生活したと話をされ、現在の小学生達は現在家にこもってゲームをしており、大事な時間に自然に接して人間の本来の能力を育てたいものと聞き、子供達に一番必要な事と感じました。

去年もお願いしました、記念館の屋根の雨漏りを本年度で修理致したく、再々の御無理を申しますが、浄財をお願い申し上げます。

★顕彰会寄付金について

【用途】 顕彰会記念館雨漏りに係る屋根修理及施設運営費として使用。

【金額】 個人 1,000以上
法人 10,000以上

★振込先金融機関 町内の農協、郵便局

★振込用紙 振込用紙は兵庫西農協用と郵便局用を添付しております。利用しやすい方をお使い下さい。

★振込期限 期限はございませんが、できれば12月末までをお願いします。

勸柳田國男・松岡家顕彰会記念館

〒六七九-二二〇四

兵庫県神崎郡福崎町西田原一〇三八-一二

TEL 〇七九-〇二二一-〇〇〇

休館日 毎週月曜日と祝日の翌日

入館料 一般 二百円 小人 百円

開館時間 午前9時30分～午後4時30分